巻頭言

若者の理工系ばなれについて
—戦前の理研はなぜ COE であり得たのか—

大越孝敬*

10年くらい前から，日本の若者が科学技術に関心を抱かなくなりつつある，との報道が見られるようになりはじめた．その頃私は，世界の政治・経済・社会において科学技術が占める比重，したがってまた科学技術者の地位は，長期的に（50年くらいのレンジで）見ればますます高まっていくはずだと信じていたので，この種の報道には少し意外の感を持った．

当時，共産圏諸国の経済的凋落が次第に露わになりつつあった．私はその大きな理由のひとつが東側諸国における情報技術の軽視にあると考えていた．一部の国では，情報の国家統制の為に民間レベルの情報流通を抑制するのが当然とされていた．その頃ある雑誌に「情報が生産力を高めることに気付かない限り，東側の凋落はますます加速するだろう」と書いたことを記憶している．このようなことから私は，「長期的には科学技術が政治・経済・社会を，したがって「歴史」を制する時代が必ずやって来る」と信じていた．この考えはいまも全く変わっていない．

しかし少なくとも短期的には，これとはまったく違う現象が起こっているわけである．「科学技術に関心を持たない者」と自認する若者の比率は，過去10年間に約20%から約40%へと2倍に増えていると言う．高等学校で「物理」を全く選択しない生徒の比率も急増しつつあると聞いている．

この問題は，いま各所で真剣に論じているが，なかなか名答はないようだ．いくつかの解答がありそうに見えるが，決定的と思えるものがなかなか見つからない．ここでは，私なりに考えて現時点で最重要の課題と思える事柄について，専ら述べてみたい．

それは，社会における科学技術者の地位，特にその経済的地位をもっと高めるべきだと言うことである．私は間もなく現役を退く年齢であるが，われわれの世代はこの点の改善に目処(めど)をつけて，若い世代に置き土産として残す責任があると思う．

第二次大戦前，日本最高の COE（センターオブエクセレンス）といわれた理化学研究所（理研）の研究者達は，高率の特許料の還付も含めて，概してなかなかの高給取りであったと聞いている．近ごろ科学技術の歴史の研究が盛んになりつつある．また一方で，基礎科学の振興について多くの提言などがなされている．しかし私の印象では，日本人の議論はややもすればキレイ事に終わりがちで，「理研の月給」といった下世話な話は，これまでは歴史研究の対象としてなかなか取り上げられなかった．戦前の理研はなぜ基礎科学の COE であり得たのか．このあたりの「歴史研究」も，もう少し推進してみたいと考えている．

* 通産省工業技術院産業技術融合領域研究所　〒305 つくば市東 1-1-4